

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	飯田麗未	指導教員 (主査)	小池 眞規子

論文題目	拒絶過敏性が身体醜形懸念に与える影響—ネガティブな反すうに着目して—
------	------------------------------------

本文概要

【問題と目的】青年期に高まる身体醜形懸念 (Bohne et al., 2002) は、容姿の欠陥への過剰な心配や強いとらわれ、過度の確認行動や欠陥をカムフラージュするための行動、社会的場面からの回避や安全確保行動と定義されている (Littleton et al., 2005)。田中 (2015) は、高い醜形懸念を有する者は他者からの否定的評価への恐れ (Fear of Negative Evaluation; FNE) を示すと明らかにしており、身体醜形懸念の背景には否定的な評価が影響していると示唆される。また、身体醜形懸念と社交不安の研究で、背景には、他者からの否定的評価の恐れ (FNE) が存在するとされている (Rapee&Heinberg, 1997)。社交不安症状と関連する特性の 1 つとして拒絶過敏性の報告もされている (中村・伊藤, 2020) ため、身体醜形懸念には拒絶過敏性が影響していると予測される。さらに、拒絶過敏性が高いと、曖昧な状況に対しても「拒絶された」と否定的に解釈することが多く、解釈にまつわる思考が持続し、自動的になり、曖昧な状況に直面した際に、否定的な解釈によって拒絶に対する予期が生起すると考えられている (Normansell & Wisco, 2017)。これは、過去の体験を反復的に想起する認知的活動である反すうと類似している (村山, 梅津, 富田, 南出, 武井, 熊野, 2020)。高い醜形懸念を有するものは、確認行動や繰り返し行動、不安を打ち消そうとする行動が明らかにされている (鍋田, 2011) ことから、嫌悪感を抱くものに対し、繰り返し考え、とらわれてしまう思考傾向は、身体醜形懸念の症状を持続させていると考えられる。そこで本研究では、拒絶過敏性がネガティブな反すうを媒介して、身体醜形懸念に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。また、身体醜形懸念の得点は女性の方が男性よりも有意に高い (田中・田山, 2013) とされていることから、本研究でも男性と女性とで検討していく。

【方法】大学生 237 名 (男性 77 名, 女性 160 名, 平均年齢 19.8 歳) に対し、Web サイトを利用した無記名のアンケート式調査を実施した。調査内容は、身体醜形懸念尺度 (J-BICI) (田中・有村・田山, 2011) (3 因子, 19 項目)、拒絶過敏性尺度 (巢山, 貝谷ら, 2014) (5 因子, 27 項目)、ネガティブな反すう尺度 (伊藤, 上里, 2001) (2 因子, 11 項目)、フェイスシート (学年, 年齢, 性別) であった。

【結果と考察】男女別の多母集団同時分析を用いて拒絶過敏性から身体醜形懸念に直接効果とネガティブな反すうを介する間接効果を検証した。その結果、男女共に、拒絶過敏性から身体醜形懸念各下位尺度へ有意な直接効果がみられ、間接効果は、男性では、ネガティブな反すうを介し「容姿への否定的評価」に、女性ではネガティブな反すうから「容姿の問題からの回避行動」に結びつきがみられた。身体醜形懸念の「容姿の問題に対する安全確保行動」にのみ関連がみられなかった。渡嘉敷ら (2021) は外見修正が安全行動であることを明らかにしているが、本研究では男女ともに外見修正は安全行動として機能していなかった可能性が考えられる。また、身体醜形懸念と関連のある容姿志向性の研究では、女性は男性より他者意識が高いこと (安達・山本, 2020) が明らかにされている。田中・田山 (2013) は、身体醜形懸念の高い女性は、他者が自分の容姿を否定的に評価しているのではないかという懸念を強く抱いていると考えている一方、男性では関連がみられなかったことも明らかにしている。このことから、男性と女性で違いがみられたのは女性の他者意識の高さが関係していると考えられる。